
アミューズメントパークでの宝探し

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アミューズメントパークでの宝探し

【Nコード】

N4889S

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

芝井探偵第10弾。連休にどこか連れて行けと姪にせがまれた芝井は自作の宝探しを提案する。同級生2人を引き連れ謎に挑戦する直美たちは芝井の用意した『呆れるほど』のお宝に辿り着けるのか。様々な暗号トリック、さらに読者への挑戦状も挿入した冒険ミステリ。

プロローグ

桜の花びらが吹雪のように舞い踊り、太陽は夏を待ちきれないかの如くアスファルトを照らしている様を窓越しから眺め、「今日もいい天気だな」とのん気に呟く。室内にはあと二人いるはずなのだが二人とも無反応、どうやら黙殺されたらしい。まあいいさ、こっちだって別に構ってほしかったわけじゃない。机の上に置いてあるコーヒーカップに手を伸ばし一口飲むと、再び外の風景に眼を向けた。

「来週は3連休だね」

テレビを見ていた少女が隣りにいる女性に話しかける。

「そうね。でもお母さんはそのうちの1日は休日出勤しなければいけないから忙しいわ」

お母さん、と称した女性は少女が言わんとしていることを察し先手を打った。だが、少女も負けてはいない。

「でも、言い換えれば2日間は休みてことよね。たまにはどこか楽しい所に行きたいな、とか思うでしょ？」

「休みて言っても直美みたいにゴロゴロ出来るわけじゃないんだから。大人は色々と大変なのよ」

直美、と呼ばれた少女はそれを聞くと口を尖らせ、頬を膨らませた。しかし、しばらくして再び母親に話しかける。

「そうだよね、大人は大変なんだよね。お母さんはもちろんだけど会社員の人や役所勤めの人、先生だってそう。みんな毎日朝から晩まで働いて偉いな。あつ、そうだ。こないだ外で新田さん見かけたけど、ゾンビみたいな顔してたよ。『やあ直美ちゃん、元気？』なんて話しかけてきたけど、新田さんの方がよっぽど元気なさそうで笑っちゃった。あれは多分徹夜明けで一睡もしてなかった顔だね」

「新田さんは刑事だから。けど新田さんみたいな人がいるから私達も安心して生活できるんだわ」

二人は何度も頷きながら新田の働きに感心しているようだ。その新田に何度も助言して事件解決へと導いた俺の実績も併せて評価して欲しいところだが、本人達にその気は全く無いようだ。それにしても何なんだ、この二人のやり取りは。「二人の話なんて気にしてませんよ」という素振りを見せながら、耳に神経を集中させて今後の成り行きを見守った。

「でもねえ、世の中忙しい大人ばかりじゃないみたいだよ」

直美が腕組みしながら考え込んでいる。何やら不穏な空気が俺の周りに漂った。

「それはそうよ。成功してお金が余っている人や年金暮らしで生活していける人なんかはのんびりできるんじゃないかしら」

「それはそうなんだけど、私成功してなくて年金暮らしじゃなくてものんびりしている人知ってるよ。しかもすぐく身近にいるような気がするんだ」

視線をかわすように咄嗟に新聞紙を広げて顔を隠した。これはマズイ、何か回避する方法を考えなければ。

「そうね。そういう人ならいつも暇だからどこかに連れて行ってくれるんじゃないかしら」

ここは一度外へ出て避難しよう。それにしても俺の事務所なのになぜ避難しなければいけないのだろう。いや、今はそんな悠長なことを言っている場合じゃない。えーと、背広はどこだっけ？

「もしかして、有。これ探してない？」

ゾクツと背筋に悪寒が走る。振り向いて直美が持っているものを確認してみると…、背広だった。直美はまるで鬼の首をとったかのような顔をして笑っている。万事休す、全ての力が抜けたように再び椅子に腰を下ろした。

「宝探し？」

優子と若菜は同時に首をかしげた。そりゃそうだ。私も聞いたときにはこんな顔になった、と頭を掻いた。いくら昼休みとはいえ、早く納得させないと次の授業が始まってしまう。次は体育だ、着替えの時間を考えると早いに越したことはない。

「うん。私も詳しいことは知らされていないんだけど、『今度の連休にどこか連れて行って』って言ったら、有が宝探しに連れていってやる、って言うもんだから」

「有って、探偵の叔父さん？」

若菜がさらに首をかしげて尋ねてくる。

「そう。まあ、こんな馬鹿げたこと考える大人も有ぐらいだよ」

無意識だが、叔父を貶める表現をしてしまう。頭は良いんだろうけど、普段の怠け者ぶりを見ているので、いま一つパツとした印象を受けないのだ。

「けど、クリスマスのときは楽しかったよね」

優子が当時の事を思い出したのかフツツ、と笑った。優子と若菜は探偵である有のことは知っている（『黒い服を着たサンタクロース』参照）。有も、私一人じゃつまらないからあの二人も誘え、と言ったのでこういう状況になっている。

「宝探してことは、お宝があるってことなんだよね？」

「うん…、そうらしいよ。全く話してくれないから判らないんだけど、有が言うには『呆れるほど素晴らしい宝物』って言ってた」

へえ、と二人の表情が明るくなる。しかし、何か釈然としないものもある。あの貧乏人が本当に宝物なんて用意できるのかしら？

「で、どう？」

諾否を促すと、二人とも首を縦に振った。

スタート（出題1）

駅に着き電車のドアが開くと、まるで蟻の大移動のように大勢の人が改札へと歩いていく。息苦しかった電車内から解放され、一步ホームへ踏み出した瞬間に吐息が漏れた。有も人混みを嫌ったのか、少し間をあけて改札を通る人がまばらになってから通るよう促した。駅を出ても人だかりは相変わらずだが、同じ方向を向いて団体行進のように整列して歩いていた。どうやらみんな目的地は同じようだ。

それも当然。本日の目的地は全国でも有名なアミューズメントパークなのだ。この貧乏人に入場券とか買えるお金あるのかしら、と飄々とした顔で歩いている有を心配そうに見上げたが、この連休中は入場料が無料だということを知って、ホッとするやら脱力するやら。

「よし、ここからスタートだ。みんな準備はいいか。トイレとか行きたかったら先に行っておくように」

軽い口調で三人の顔を見回した。

「じゃあ、私ちよつと行ってくる」

優子がトイレの方へ歩いて行くと、「私も」と若菜も小走りで後を追いかけていった。

「直、ちよつといいか」

えっ、と叔父の方へ顔を向けると何やらポケットをゴソゴソし、何かを取り出した。小さな鍵だ、持ち手のところにはイチヨウの葉のような模様が描かれていた。それを私の手に握らせると真剣な顔つきで話し始めた。

「この鍵は、最後の最後で必要になるとても重要なアイテムなんだ。これを直に渡しておくから大事にしまっておくんだ。二人には絶対に言ってはならない、言ってしまうと宝に辿り着けなくなってしまうからな」

有が私の手を包み込むように握ると、ニツコリと笑った。小さな鍵なのにとても重く感じ、手の平には汗が滲んでいた。しばらくぼうつとしていると二人がトイレから出てくるのが見えたので、素早くポケットへ忍ばせた。

「よし、今度こそ準備はいいな。ルールを説明するぞ」

有が施設の案内板を指差した。現在地は入場ゲートを通過して直ぐの門の前。目の前には各種グッズ等を売っている販売店とその横には食堂やレストランやらの食事処。その先には、左から遊園地、動物園、色んな遊戯がある公園、植物園、水族館となっている。

「いろんな施設がある中の色んなところに謎を散りばめた。お前達はその謎を解いていってお宝を見つけて欲しい。最初のお題は俺から出題する。そこからスタートだ」

と言つて、有は一切れの紙を三人の前に差し出した。それを受け取ったあと「じゃあ、頑張れよ」と手を振りベンチへ腰掛けてしまった。三人はお互いに目配せすると、4つ折にされた紙を広げた。

□

鳥が鳴く、E L U G

空を見る、V N B

風が吹く、Z L Q G

を歩く、S D U N

私は未来を予知できる者、君達の3歩先を歩いている。

化する者より

地上を浄

『

「何、これ？」

三人とも面食らった表情になった。謎って、なぞなぞとかじゃなくて本格的な暗号なんだ…。

「最後の『』を埋めればいいんだよね……」

若菜が困惑した表情で呟く。三人の宝探しが始まった。

読者に挑戦状

暗号の答えは？

スタート（出題１）（後書き）

ヒント

- ？意味が判らない部分が全て英語になっているところがポイント
- ？鳴いた、眺めた、吹いた、歩いた等の動詞には意味が無い
- ？『地上を浄化する者』は暗号を解くものには直接関係しない
- ？『何』が私達の『３歩』先をいつているのだろうか？

謎解き1

「どう考えても怪しいのは英語の部分だよな？」

「けど、未来を予知できる者とか地上を浄化する者とかっていうのも意味が判らないよ……」

結局のところは何もかもが怪しいのだ。ひとつずつ考えていくしかない。

「優子、鳥は英語で『バード』だよな？」

紙に集中していたのか、ビクツと肩を揺らした。

「うん、『BIRD』だよ」

「じゃあ、『鳴く』は英語で何て言うの？」

優子は腕を組みながら思索している。

「『SING』…、かな。どうして？」

「『ELUG』って英語でしょ？もしかしたら、どこかの文字を英語に直したら何か浮かんでくるんじゃないかなあ、って思ったんだけど…、違ふみたいね。」

「けど、直美ちゃんの考えていることは鋭いと思う。私も気になったから」

若菜も同調した。それじゃあ、ということで全ての単語を英語に変換してみることにした。空は『SKY』で、見るは『LOOK』。風は『WIND』で、吹くは『BLOW』。は判らないので措いておくとして、歩くは『WALK』。

優子の書いた英単語をじっと見つめる…、がちつとも判らない。

三人とも知らず知らずのうちに、小さく唸り声を上げていた。

「何で、『空を見る』のとこだけ英語3文字なんだろう？」

優子が呟くような小さな声で言った。本人も何か判ったから発したのではなく、ただ何となく気になったから呟いたというのが正解だという事は優子の表情を見れば一目でわかる。

「そうだね、他の文字は4文字だもんね。さっき優子ちゃんが書い

てくれた英語を見ても全部4文字だけど『S K Y』だけが3文字で一緒だね」

書き並べられている英単語を見て、ほんとだ、と思った。

「じゃあ、『V N B』と『S K Y』とが何かしら関係があるってことかな。それでも何がなんだかさっぱりだけど。ん…、訳の判らない英単語をよく見たら、同じ文字が何個が使われてるね」

『鳥』と『風』の文の『L』と『G』が共通している点を指摘した。が、それも何か根拠があつての話じゃなく、気になったから言っただけだ。次から次へと難問が飛び出してきて、髪の毛をクシャクシャと掻きむしりたい衝動に駆られてしまう。

私が指摘した点を聞いた後、しばらく誰もしやべらなかつたが、急に若菜が「あっ」という声を上げた。私と優子は一斉に若菜の顔を見る。

「さつき直美ちゃんが言ったことは正解なんだよ。だって『B I R D』の『E L U G』、『W I N D』と『Z L Q G』とを比べて見ると『B I R D』の『I』、『D』と『W I N D』の『I』、『D』のところには2つとも同じ『L』、『G』が当て嵌められているから。つまり、この意味の無さそうな英文字は、何かの法則でこうなっているんじゃないかしら」

法則？と眉間にしわを寄せて声を発したら、若菜は「どういう法則かはわからないけど…」と申し訳なさそうに小声で言った。

「未来語で話してるんじゃない？だって未来を予知できるんでしょ、この人」

そう。英語にばかり拘っているが、日本語の文章も意味がわからないのだ。仮に未来語で話をしていたらお手上げた。

「でも私達より3歩だけだよ、未来っていうほど先の事じゃないみたい」

「そもそも1歩ってどれくらいなんだろ？英語が未来語に変わるくらい歩幅だったら3歩はすごく大きいよ」

優子と若菜が交互に話し「それじゃ私達が今、塾で習っているこ

とが全部無駄になっちゃうね」とか言って笑っていた。

英語、未来語、3歩先…。

「!!!」

体中に震えを覚えた瞬間、優子からメモ帳をもぎ取りアルファベツトを書き殴っていった。二人は啞然として私を見ているが、そんなことはどうでもいい。書き終わり、紙とメモ帳とを見比べた後、ふう、と一息ついてニヤリと笑った。その顔が薄気味悪かったのか、二人の顔が引きつっていた。

「何か、判ったの？」

恐る恐る、といった口調で若菜が尋ねてくる。

「判ったわ、答えが」

えっ、優子と若菜が同時に声を上げる。自分が解いたんだ、という満足感と二人が私を羨望の眼差しで見ている優越感に体が溶けそうになるほど熱くなるのを感じていた。

「で、で？」

と優子は先を急がせようとする。若菜も黙ってはいるが早く答えを聞きたそうだ。唾を飲み込み小さな喉仏が上下に動くのが見えた。「今から説明するから。結論から言つと、私達が考えていたことは全て合っていたんだわ。『鳥』を『B I R D』にすることや『風』を『W I N D』にすること。そして『空』が『S K Y』の3文字になり、そこから『S K Y』と『V N B』が関係すると考えたことも」「それでも『V N B』じゃ意味が判らないよ」

若菜が心配そうに私の顔を見る。

「そこで次の文章が大事になってくるの。でも、未来を予知できる者の箇所じゃなくて『3歩先』のところ。つまりこの紙は、英語の部分と日本語の文をバラして考えるんじゃないかって、合わせて当て嵌めることで初めて意味を成すものなのよ」

二人は話しについていけない様子だが、百聞は一見に如かず。これを見れば一発で理解してくれることだろう。

『A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
X Y Z A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W』

「これを見て説明すれば一目で判るよ。この紙でいうところの未来を予知できる者が3歩先を行っている、という表現は『アルファベツトを3つ前へずらせ』ということを行っているの。つまり私たちが『D』だと思っているものが、未来の人には『A』になる。そう考えて当て嵌めてみると『E L U G』は『B I R D』に、『V N B』は『S K Y』に、『Z L Q G』は『W I N D』になる。この法則で『S D U N』を考えてみると『P』『A』『R』『K』
「パーク…、公園だ！すごい、直美ちゃん！」

二人とも私の手を強く握り、飛び跳ねんばかりに喜んだ。それを見た私も嬉しくなって照れ臭そうに微笑んだ。

走って公園へ行く二人を追いかける私の顔は、謎を解いたという高揚感で自然とニヤケてしまい、通行人に怪訝そうな顔で見られてしまった。

出題2

公園の広場に着いた。広大な土地に広がる芝生で、ある人は寝転んで居眠りしたり、ある人はバトミントンに興じたり思い思いのことを満喫している様子だ。

「公園に来たのはいいけど、ここからどうすればいいのかな？」

さっきの喜びはすでに吹き飛び、再び三者三様困った表情を見せた。

「直美ちゃん、さっきの紙みせてくれる？」

背後から若菜が言ってきたので少し驚いたが、気を取り直してポケットにしまっておいた紙を取り出し、若菜に差し出した。

この三人が仲良くなつて久しいが、休み時間もずっと本を読んだりして大人しい若菜が、私達にはこんなに積極的に話しかけたりしてくれることが素直に嬉しかった。うふふ、とニコニコしているとそれに気付いた若菜が「どうしたの？」聞いてきたが、「別に」と思わせぶりの顔で言うと、首をかしげた後再び紙のほうへ目を向けた。

「この『地上を浄化する者』って何だろ？直美ちゃんが解いてくれた謎には全く関係無かったよね」

確かに先ほど解いた謎の中で唯一使用しなかった言葉だ。これが次の行き先を表しているんだらうか。

「ねえ、『浄化』って何？」

基本的な質問をする。そんな小難しい言葉を並べられても私には理解できないのだ。単に勉強ができないだけだ、とは認めたくない。「きれいにする、っていう意味だよ」

若菜が教えてくれる。

「あの人じゃない、地上を浄化する者って。見たまんまだけど」

優子が指差す方へと顔を向けた。そこには茶色の作業着を着て、竹箒をせわしく動かしゴミを集めている初老の男性がいた。

「あの、すみません」

男性に近づき、そう言ったものの、次の言葉を用意していなくて話しかけながらも口を閉ざしていると、男性の方が目を大きく見開いて三人をじっくり観察するように見回した。

「ああ、君達はあれか。宝探しをしている…」

三人が大きく頷くと話を途中で止め、ズボンのポケットから紙を取り出した。

「これこれ。宝のありかを示しているんだってな。君達が宝を見つけたらおじさんにも少し分けてくれよ」

頭を撫で、笑顔で紙を渡すと、箒を持って去っていった。

こういう感じで進んでいくんだ…。有の奴、いろんな人を巻き込んでるな。

まあ、何はともあれ次のステージには来たわけだ。さきほどのデジャヴのようにきつちりと4つ折りされている紙を、三人は息をひそめて開けた。

□

ある部屋から大事な宝石が盗まれた

その部屋にはちゃんと鍵が掛けられ、窓も閉じられたまま。

いわゆる完全な密室状態だった。

容疑者は4人。それぞれの証言を聞いてみよう。

「私はこの部屋を通り過ぎただけです。そこに宝石があることは知っていましたが、鍵が掛

かっていてどうすることも出来ませんでした」

と話すのは、ピッキングで窃盗の前科がある痩せた男。現在は某遊園地のお化け屋敷でアルバイトを

しているらしい。

「私も旦那様にお茶をお持ちするために通っただけです。鍵は旦那様がお持ちですし、合鍵の1本はその壁に掛かっています。その鍵はずっとそこにあったのはみなさん知っているとします。だいたいの長年の仕えしている私がなぜそのようなことをしなければいけないのでしょうか」

とは、家政婦の中年女性。時々近くの食堂でパートとしても働いているそうだ。

「俺もこの部屋の先にある書庫に用があっただけだ。宝石？知ってたよ。それが見たくてこんなへんぴなとこまで来たんだから」
元々技術者だったらしく、日本一と謳われるジェットコースターの設計にもたずさわっていたという。

「私はこの主人に用がありましたのでこの部屋を通りました。この宝石のある部屋の鍵は実にユニークな作りだと思い、どこで作らせたのか確認したくて」

こう言うのは、紳士的な青年。現在防犯グッズ販売会社を設立したらしい。

今でこそ真つ当な人生を歩んでいるようだが、以前には一緒に遊園地でアルバイトをしている同僚に暴力を振るい警察沙汰になった経験の有している。

さて、ここで状況をまとめてみよう

？部屋には鍵穴はもちろん、あらゆる箇所に細工された形跡は一切見られない

？家政婦以外の人間はここに来たのは初めてであり、その家政婦も一週間ぶりだった。

？犯人はこの4人以外に考えられない

？犯行当時と犯行後、いずれも間違いなく部屋には鍵が掛けられていた。

うゝん、と腕を組み考えていたが、神がかり的に閃いた。

「犯人はあなただ。あなたは を使用して部屋に侵入し、宝石を盗み出した。 を 出来るのはあなたしかいない、そうですよね」

指を突きつけ勢いよくまくし立てると、犯人はがっくりと膝を折った。

連行しようと歩き出すと、何かが背中当たった。バナナだと確認する間もなく今度はコップが飛んできた。

「イテツ、何をするんだ」

手で顔を守りながら振り向くと、残りの三人が手当たり次第に物を投げつけてきた。鉛筆、リモコン、眼鏡に本。

「ふざけんじゃねえ！」

勢いはさらに増す。時計、パソコン、扇風機が宙を舞う。

「やめなさい！ 私じゃない、作者が悪いんだよ」

ほうほうの体で館を脱し、青あざをさすりながら逃げるように署へと向かった。

さあ、犯人を捕まえよう！

『

「宝石、だって。これがお宝なのかな」

優子の目が光った。が、断言するがそれは絶対にあり得ない。有の生活水準を知っている私が言うんだから間違いない。しかし、それは黙っておこう。いわゆる、大人の対応ってやつね。

「とにかく、これを解くのを最優先にしなきゃ」

発破をかけると、若菜の首がニョキッと伸びてきて紙を覗き込むように眺めてきた。目が活き活きしているところを見ると、若菜はこつという謎解きゲームが好きなのかもしれない。

私も負けてはいられない。前の謎を解いたのは——随分とヒントを提供してもらったものの——私なのだ。さっきの高揚感をもう一度、と奮い立たせて若菜の方へ顔を寄せ、くつつき合うかのように紙を覗き込んだ。

読者に挑戦状

犯人は誰か？

出題2（後書き）

ヒント

？先入観を捨てて下さい

？真面目に考えないで下さい（答えは本当に下らないものです）

？ある一つの言葉に違和感を覚えれば簡単に解けます

謎解き2

「密室だつて…、何か本格的だね」

「やっぱり今度も　を埋めなければいけないわけね。けど、暗号のような意味の判らない箇所はないね」

「『犯人は誰だ』つて言っているから、犯人が判れば自ずと行き先も見えるつてことなんだと思うけど…」

三人は紙に目をやりながら、お互いが言っていることなど耳に入っていない様子で、各々独り言のように呟いている。

「ねえ。さっきの暗号じゃ公園のおじいさんに紙をもらえたよね。これも同じように犯人のところに行けば紙がもらえるんなら、謎を解かなくても一人一人のところに行けばいいんじゃない？」

優子が二人の顔を見ながら話しかてくる。

「ズルするつて事？それは駄目だよ。確かに頭を使って疲れるけど、頑張ろうよ」

若菜がめつたに見せない険しい表情で優子を励ます。

しかし、私は両方の気持ちに共感を覚えた。これら謎解きの目的はあくまで『宝を見つけること』であり、謎を解くことではない。どうせ同じ目的にたどり着くのなら、合理的で早い方がいい、という考え方もできるし、時間がかかろうともあくまで正攻法で正面から謎に取り組み、それをクリアすることで目的地にたどり着く、という信念や意思を重視し、謎の出題者に敬意を払う考え方も理解できる。

どちらが正しいなんていえない。だつて道は違えど目的地——宝を見つける——は変わらないのだから。

「じゃあ、こうしない？優子は試しに誰かめぼしい人の所に行つて『犯人ですか？』みたいなことを仄めかして相手の様子を探る。それでさつきみたいに紙をくれたら、この謎はクリアできるわけだから次の場所に行く。謎は…、また時間があるときに考えよう。答え

が判らないままっていうのも何か気持ち悪いしね。そしてその間、若菜と私は謎解きに挑戦する。優子が探っている間に解ければ、別にウロチヨロしなくても直接犯人のところに行けるわけだしね。要するに今回は別行動で謎を解こうってわけ」

首を左右に振り二人の顔を確認すると、同時にゆっくりと頷いた。「じゃあ決まりね。1時間後にここに集合ってことでいいかしら。二人とも頑張ってね」

二人の背中をドンと押すと、優子は苦笑いをして歩いていった。

「ごめんね、あんな事言っちゃって」

優子が立ち去った後、残った若菜が申し訳無さそうに俯きながら話してくる。

「別にいいじゃない、どっちも悪いこと言ってるわけじゃないし。それに私も謎が解けないまま終わるっていうのは、有に負けたみたいで腹立つしね。ほら、若菜も早く謎解かないと、先行けないよ」

そう言うのと、若菜も少し頬を緩めた。

「今回ののは、取っ掛かりがないから難しそうね。私達に密室の謎なんて解けるのかしら」

紙を見ながら言う。先ほどのように暗号ではないため、どこから考え始めたらいいのかが判らない。

「そうでもないみたいだよ、直美ちゃん。最後のところ見て。犯人じゃない人たちが怒って物を投げてるでしょ、それに対して警察の人は『作者が悪い』って言っているし、冗談みたいな終わり方している。これって、この謎の答えがあまりにバカらしくて登場人物が怒っているんじゃないかしら」

「つまり、真剣に考える必要はないと…」

若菜はコクン、と首を縦に振った。

十分にあり得る発想だ、あの野郎なら。この謎に真剣に取り組んで四苦八苦している私達を見て、ほくそ笑んでいる有の顔がチラチラと頭の中を掠め忌々しい。

「そうだとしても難しいのには変わりないよね。見たところ全員怪

しそうだよ。元窃盗犯なんて、簡単に鍵を開けそうじゃない」

「けど、ここ見て。鍵の作りがユニークだって言っているから、そう簡単に開けないみたいだよ。それに鍵を開けたとしても犯行後鍵を閉めることは出来なかったんじゃないかなあ。閉める必要もないだろうし」

そこはシビアに考えるのね。真剣な顔つきの若菜を見て苦笑した。「それじゃ、技術者の人は？いかにも手先が器用そうだけど」

「うーん、難しいね。初めて犯行現場に来た人が、そう簡単に鍵開けなんて出来るのかしら」

それは何とも言えない。少なくとも紙面上での記載は無い。

「じゃあ防犯グッズを売っている人にも言えちゃうね」

「そうだね」

紙から目を逸らさずに若菜が答える。真剣に考える必要はないはずなのに、真剣に考えなければ解けない現状。頭の中がこんがらがってきた。

「残りは家政婦の人しかいないよ。一番怪しくなさそうだけど」

「けど、二時間ドラマとかじゃ、一番怪しくない人が犯人だってよく言うよね。案外こういう人が犯人なのかも」

ドラマを引き合いに出されてもピンと来ないのだが、若菜がそういうのだからそうなのだろう。けどそう言われてしまうと、誰でも犯人になり得るんじゃないかと思えるのだが…。

「難しいね…」

ボソリと呟いたが、若菜の耳には届いていないようだった。お互い無言のまま紙をじっと眺めていた。

しばらくすると、遠くの方から優子がこちらへ歩いてくるのが見えた。冴えない表情をしているところから察するに、ズルできなかったんだろう。

「どうだった？」

一応聞いてみるが、優子は手を大きく左右に振った。

「ダメね。食堂のおばさんに聞いたけど『何で？』みたいな返答さ

れちゃったし、そもそも広い遊園地から紙に書かれている男の人を見つかるのだけでも大変。途中であきらめちゃった」

やはりこの謎を解くことが最も近道なのだろう。急がば回れ、そんなことわざがあったよな。

「で、そっちは。犯人判った？」

優子が尋ねてくるが、さっき優子がしたように手を振った。「難しいね」とまた呟いた。

「そもそも密室なんて難しいこと私達に判るのかしら。あゝ、お腹すいた。さっきの食堂で何か食べればよかった」

欲求にストレートな性格の優子が愚痴をこぼす。私と若菜は聞かなかったふりをして、紙に目を向けた。

「これって、密室のことは考えなくてもいいのかもしれないよ」

若菜が言った。顎に指をあて、難しそうな顔をしている。

「何で？」

「だって、鍵や部屋には一切細工していないって書いてあるし。密室のようにみせかけるっていうことは、何かしらの細工が必要でしょ？それを否定しているっていうことは、そこは考える必要はないですよって意味しているような気がして」

なるほど、さすがに若菜は鋭い。私は有の性格から直感で遊び半分で作った問題だと思ったが、若菜は論理的な解釈で導き出している。

「けど、密室に関して何にもトリックが無いとしたら、犯人はどうやって鍵を開けて宝石を盗み、又鍵を閉めて出て行ったんだろ？」

細工無しで鍵を開け閉め出来る方法…、そんな魔法のようなこと出来るのかしら？

私と優子が唸っていると、若菜が何か話したそうにモジモジしているのが見て取れてた。

「どうしたの、若菜。何か判った？」

「これは全然自信がないんだけど…、あまりに馬鹿らしくて」

なんとも踏ん切りがつかないようだ。首を傾げながら俯いた。

「一回言ってみなよ。間違ってたらまた考え直したらいいだけだし、軽い口調で優子が言う。その軽さが逆に励みになったのか、顔を上げ話し始めた。

「絶対間違ってると思うけど、そういう気持ちで聞いてね。犯人は…、鍵を使っただんじやないかな、正確に言つと合鍵になるんだけど」「鍵？」

私と優子が同時に声を上げた。どうということだ？

「そう。本当の鍵はこの館の主人が持つていて、合鍵1本は犯行前も犯行後も壁に掛かっていたっていう設定だよ」

「そうだよ、だから鍵なんて使えっこないんだよ」

口調が強かったのか、若菜がシュンと体を縮めた。

「その『2本』は使えないよ。でも『3本目』があつたとしたら…。その紙には『合鍵の1本は…』っていう言葉で書いてあつて、『合鍵は壁に掛かつてある1本だけ』とは書いてないよね。事前に1本目の合鍵を複製しておいて犯行当日に使用すれば、細工無しで開け閉めできるんじゃないかしら」

「えゝ、それじゃ誰でも犯人になり得るじゃない」

別に若菜は悪くないが、自然と抗議するような口調になつてしまふ。

「だから、家政婦以外の人は館に初めて来た、ということと鍵の作りがユニークだという説明をしたんじゃないかしら。他の人が盗んだり複製したりする機会を与えないために」

「それが答えだとしたら、ちよつとバカにしすぎじゃない、この問題」

優子はご立腹のようだ。しかし、そう考えれば全ての辻褄が合うし、優子が思ったように犯人以外の人物が物を投げつけた理由も説明がつく。実際、私も有に何かぶつけてやりたい気分だ。

「ということは、犯人は家政婦さんしかないってこと？」

「そう、だと思う…」

二人に言い寄られ、若菜も次第に自信を失いつつあるようだ。声

がか細くなつてきている。

「とにかく行ってみようよ、私もそれが答えのような気がするし」

優子と若菜の手を握り食堂の方へ引つ張っていくと、ヨタヨタと足をもつれさせながら流れに身を委ねるようについてきた。

食堂の前に立つ。昼前ということもあり、広い入り口からも人がひっきりなしに出入りしている。その前で、呼び込みだろうかエプロンをつけた中年女性の姿を見かけた。

「さっきはあの人に声を掛けたんだよ」

優子が指を差して話し出す。確かに、店内を見回した限りさっきの紙が示す中年女性に該当する人はこの人しかない。

「あの…」

「あれっ、さっきのお嬢ちゃんじゃない。今度はお友達も連れてかい？」

少し驚いた様子に不自然な点はない。私達は間違っているんだろうか。

「あの、この紙が示す犯人さんですか？」

若菜が女性に紙を見せ話し出した。内向的な性格の若菜が自ら前に立ち他人と話すということは珍しく、自分の意見に対する責任感からきているのだろうことは容易に想像できた。

「何でそう思うの？」

若菜が話している脇で優子が私の服を引っ張り「さっきも同じことと言われたよ」と小声で教えてくれた。

「多分、『合鍵』を『複製』したんじゃないかと思ったんだけど…」

消え入りそうな声で若菜が言う。女性は少し沈黙した後、微笑みながら若菜の肩に手を乗せる。

「正解だよ、お嬢ちゃん。賢いね」

今度は違う手で頭を撫でる。若菜はホツとしたように胸を撫で下ろした。しかし、優子は納得していない様子だ。

「えっ、さっきお話したときはそんなこと一言も言わなかったじゃない」

プリプリと頬を膨らまして抗議している。

「お父さんに口止めされていたのよ。答えを示すまでは紙を渡さないで下さいね、って。だから『どうしてそう思ったの?』って尋ねたでしょ。さっきお嬢ちゃんが一人で来たときも正解を答えてくれたなら喜んで渡したわよ」

「お父さん?」

優子は困惑した様子で首を傾げていた。多分、有のことだ。ズルすることを防止するために先手を打っておいたのだろう。しかし、あのモテ無さそうな独身男が、私達三人の『お父さん』だとは…、失礼な話だ（俺だって迷惑だ、という有の声が聞こえてきそうだが無視しよう）。

「それで、次の紙は?」

「それは、ご飯を食べてからに下さい。三人ともお腹空いているでしょ?」

女性が店内へと促してくるが、お小遣い程度で食べられるお店なのかな。

「あの、お金…」

若菜が小さい声で女性に話す。そりゃあ、みんなそこは心配するところだ。

「いいの、もうお父さんに貰ってるから。好きな物食べていいわよ」好きな物、と言われ即座に優子と若菜の表情が明るくなった。これも有の仕業ね、全くどこに何を用意しているのか判ったもんじゃない、と苦笑している私をよそに、既に二人は席に着きメニュー表を一心不乱に眺めていた。

出題3

「あゝ、もう食べれないわ」

優子がお腹をポンと叩いて笑った。もう、こんなとこ優子のおばさんに見られたらこっちまで怒られそうだわ、と優子の母親の顔を想像して苦笑した。

「おいしかった？」

さっきの女性が空になったコップに水を注ぎながら尋ねる。私達は「はい！」と威勢のいい声を発し、女性にお礼を言った。

「ああそう。この食堂の隣りにグッズの販売店があるでしょ？ほら、髭を生やしたおじさんがいる。あそこの商品どれでも1000円以内なら1個貰ってもいいからね。もちろんお父さんからお金貰ってるし、あの髭のおじさんには話しは通してあるから安心して」

再び三人の目が輝きだした。しかし、はしゃいでいる二人をよそに、1000円以内に限定するのは貧乏人の有らしいな、とちょっと可笑しくなつてついつい笑ってしまった。

「これが、直美の叔父さんが言つてた『お宝』なのかな？」

優子が私の顔を見る。

「いや…、違うと思う。だって、有は『呆れるほど素晴らしい』って言つてたから。お土産は確かに嬉しいけど、呆れるほどつてこともないと思うし…」

一人で唸っていると、沈黙を破るかのように女性が話しかけてきた。

「じゃあ、これお父さんが用意した紙ね。確かに渡したわよ」

代表して私が受け取ると、女性は笑顔で仕事場へと戻つていった。「次はどんな謎なんだろ」

と例の如く4つ折りにされている紙を開こうとすると、優子が私の手を止めるように握ってきた。

「それもいいんだけど、先に売店行かない？」

優子は謎より買い物を優先したいようだ。私は別にいいけど、と若菜のほうへ目をやった。

「うん。いいけど、今は見るだけにしようね。物を持ちながら歩くのは疲れるから」

三人が同意したということで、謎解きは後回しにすることにした。紙をポケットにしまうと先に走っていった優子を、若菜と苦笑いしながら後を追った。

食堂も広がったが、この売店もそれに輪をかけて広がった。このアミューズメントパークのマスコットキャラクターのグッズ各種はもちろんのこと、野球やサッカーの日本代表のユニフォームがマネキンに着せられて飾られていたり、キーホルダーやストラップ、食べ物のお土産等がズラリ取り揃えられていた。優子はもう衝動が抑えられない、といった感じで走り回り、若菜も静かながら瞳に輝きを帯びていて楽しそうに商品を手に取り眺めている。と、冷静に分析している私といえば…、

「わー、これ欲しいなー」

心の中で思っていたつもりが、無意識のうちに声となって発せられたようだ。少し遠くにいた若菜が近寄ってきた。

「それ欲しいの？直美ちゃんはサッカー好きだね」

「これは日本代表のユニフォームで好きな選手の背番号なの。FWっていつてゴールを決める選手なんだけど、この人は守備も一生懸命して、上手いんだ。そして何より自分が目立つんじゃなくてチームが勝つことを最優先にしている選手なの、だから同じポジションのライバル選手にも平気でアシストするパスを出す。高さもあってスピードもあって決めるときには自分で決める、そういうすごい選手なんだよ。ものすごく口数の少ない人なんだけど、そこがまた良いんだよなあ」

一度話し出すと止まらなくなり、熱く語り出してしまった。サッカーに興味を持たない若菜が聞いたって何が何だかサッパリだろう。「あ…、ごめんね。一人で熱くなっちゃって」

ユニフォームを元の場所に戻し、若菜に謝った。若菜は私の語っている表情が面白かったのか、ニツコリと笑いながら「全然構わないよ」と言ってくれた。

随分と時間を費やしてしまった。最初に売店にきたときと同じテンションではしゃぎまくっている優子を説得し、宝探しを再開することにした。

「あゝあ、まだ半分くらいしか見れてないよ」

優子が口を尖らせながら言う。しかしその顔は充実感でいっぱいの子、「最後のお楽しみにしよう」という私の言葉に渋々了承したようだ。

「じゃあ、紙を開くよ」

売店を出てすぐ足を止め、ポケットから紙を取り出した。何度この光景を体験してもドキドキしてしまうのは何故だろう。

☐

堅にあって、軟になし
雪にあって、晴れになし
弱にあって、強になし
虎にあって、狼になし
占にあって、予言になし
交にあって、平行になし
里にあって、都会になし

最終的に頭を使えば完成だ

☐

「今度はさっきの密室と違って読み易いね。文章でもないみたいだし」

優子が言ったが、内心私もホツとした。長い文章の問題は読むだけでも相当疲れてしまう。だからと言って、この謎が簡単に解けるものでもないんだろうけど。

何だか眠くなってきた、と毎度愚痴をこぼす優子を放っておいて、私と若菜はじつと紙を見つめた。

読者に挑戦状

次の行き先はどこか？

出題3（後書き）

ヒント

？文章の漢字をそのまま捉えても意味はない

？最後の一文『最終的に』はこの謎を解くのに直接関係はない

？行き先そのものを表しているのではなく暗示するものである

謎解き3

「『堅い』にあつて『軟らかい』にないもの…、何かものすごく堅いものって何かあるかな」

腕組みしながら頭を捻つても良い案は浮かんでこないが、みなこの体勢に馴染んできたのか、様になっている雰囲気が出ていて笑える。

「けど、その次は『雪』と『晴れ』だよ。どっちも堅くないよね」
若菜が真剣な顔つきでいう。雪を手で強く丸めて力チ力チにしたら堅くなるよ、という冗談を言える状況ではない。

「その後を見ても『弱』だの『里』だから、文章の流れ自体に意味はないんじゃないかしら」

さつきまで愚図っていた優子も若菜に賛意を示す。

「最終的に頭を使えば、ってどういう意味なんだろ。最終も何も常に頭は使ってるよ」

「判らないけど…、この謎に関しては基本的には頭を使わなくても良いってことなのかもしれない。けど謎を解く最後の仕上げとして知恵を絞らなければいけない、ってことなのかな」

若菜も半信半疑で口調も鈍い。まあ、まだ始まったばかりだし、自分も何も浮かんでこない現状を考えれば仕方の無いことだ。

「今回は取っ掛かりが無いね。意味の判らない英語でもないし、ふざけて怒った登場人物もいないし」

作りがシンプルなだけに掴みどころが無い。早くも頭を抱えてしまふ。

「取っ掛かりが無いっていうところにヒントがあるのかも…。全体を見るってことなのかな」

若菜が独り言のように呟いた。真剣に取り組んでいる若菜の顔を見ると、さっきのようなふざけた問題でないように、と祈ってしまう。

「直美、さっきのお昼ご飯はオムレツ食べてたね。おいしかった？
今度は私もオムレツにしようかな」

優子が場違いな発言をしてくる。若菜がこのことに気付いていないのが幸いだ。心ここに在らず、とは今の優子のような状態を言うのだろう。

「うん。でも優子のハンバーグも美味しそうだったよ」

愛想笑いで切り抜け、紙に集中する。『あり』と『なし』に分けられているってことは左の漢字には何かが『ある』ってことよね。

それとも、前みたいに英語とか変換するのかしら？ 堅いの英語って…、知らないわ。

「これって、何かに変換するってことじゃないみたいだね」

一応若菜にも尋ねてみる。

「うん、多分。前みたいに3歩進めるとかっていうことでもないみたいだし」

有のことだ、それなら何らかのヒントを提示しているはずだ。現に前2問にはあったのだから。

「何の脈絡もないのがツライよね。虎と狼を比べるだけなら何かありそうだけど、交と平行なんてサッパリだもんね」

うん、と頷いた若菜の表情は冴えない。

「若菜は何食べたの？」

「またも優子が割り込んでくる。」

「えっ」

我に返ったような表情で優子の顔を見た。

「お昼ご飯だよ、私はハンバーグだったんだ」

「ええと、スパゲッティだよ、たらこスパゲティ」

若菜は謎解きを遮られたことを別に気にする様子でもなく、淡々と受け答えしていた。私だったら少しムッしていたかもしれない。学校の中でも大人びているというか、落ち着いているというか喜怒哀楽をあまり表に出さない若菜を見て、頼もしく感じることもあれば寂しく感じることもある。どっちがいいんだろう…、答えなんて

あるのかな。

「スパゲッティかあ、スパゲッティも良いよね」

優子は私のようにゴチャゴチャ考える思考回路は持ち合わせていないようだ。それも良いのか悪いのか、答えは出ないんだろう。

こんなことを考えている場合ではない、今度こそ集中しなければ。『弱』にあつて『強』にない、扇風機？いや、扇風機には弱も強もある。ついでに言えば中も。『里』にあつて『都会』にない、森林もしくは山？これもパツとしない答えだな。そもそもどこから都会でどこから里になるのか、その境界線が判らない。

結局、一つの文から何ががあるのか掴めない。若菜の顔を見ても険しいままだ、話しかけても無駄だろう。

「みんな洋風のもの食べたから、夕ご飯は何か和風なものがいいね」
三度横槍が入る。自然と私が聞き役になる。

「そうね。親子丼とか美味しいもんね」

又も愛想でスルーしようかと考えたが、今度は逃がしてきれないようだ。

「違うよ、直美。日本食ならお寿司だよ。この前パパに連れて行ってもらったお寿司屋さん、本当に美味しかったんだから」

その当時を思い出したのか、満面の笑みで話しかてくる。優子の家はお金持ちだから、お寿司屋さんといえば回転寿司とかではないのだろう、私が行ったこともないような。羨ましい、と少しは思いうけど、それはどうしようも無いことだし、どうでも良い事だ。私のお母さんは朝から晩まで頑張つて働いている。それで良いんだ。そして私達母娘は幸せだ、お金の多少で幸せは決まらないことくらい10歳の小娘にもわかっていているつもりだ。

「ねえ、若菜もそう思うでしょ？」

若菜、と呼ばれてハツとして優子の顔を見る。そして先ほどのように「えっ」と問い返した。

「お寿司だよ、お寿司。若菜も好きでしょ」

「うん。お寿司は好きだよ…」

話が途切れたと思い再び紙に目を戻した瞬間、若菜が「あつ」と小さく声を上げた。

「どうしたの？」

若菜の驚いた表情を見て、たまらず問い返す。私のほうを振り向いた若菜の表情は明るかった。

「解けたかもしれないよ、直美ちゃん」

「えっ！」

さっきまでの険しい表情が嘘のように晴れやかな若菜の表情。そんなに一瞬で解けるような謎だったのだろうか。若菜が口を開くのを待つ。

「これね、左の漢字には全部『魚偏』がつくんだよ。魚偏に弱で『鰯^{いわし}』って読むし、魚偏に堅で『鯉^{かつお}』だし。他の漢字は読めないんだけど、この前お寿司屋さんに行ったとき、こういう魚偏がいっぱい書いてある湯飲みがあつたの。『ある』方はどれも見覚えがあるけど、『ない』方には見覚え無いから間違いないと思う」

すごい。若菜のひらめきに感嘆した。いや感嘆しただけではない。すごいよ、若菜。天才なんじゃない」

そう言つて手を握ると、若菜は照れ臭そうにはにかんだ。

「これは優子のおかげだよ。お寿司の話題がでなかったら、私も思い付かなかつたもん」

うーん、それは少し違うような気が…。しかし、本人がそう言うのなら何の文句もない。そういう若菜の謙虚さが大好きなところでもある。

「ということは、次は…」

「魚…、水族館ね」

私と若菜は顔を突き合わせて、声を上げて笑った。

「優子、行くよ」

状況を把握していない優子は「何処に？」と目を丸くして尋ねてくる。

「何処つて、水族館よ。優子のおかげで解けたのよ」

私の言葉が優子の混乱に拍車をかけキョトンとして佇んでいる姿を見て、若菜と二人でまた笑った。

出題 4

「水族館に着いたものの…」

どうすればいいのかな、とは言わなくても二人とも判っていた。

「今までの流れでいくと、さっきの紙に書いてある『最終的に頭を使えば完成だ』という言葉の意味を考えないといけないね」

当然といった様子で若菜が答える。そうなのだ、今までの謎において行き先と次に尋ねる人とがセットになっていた。尋ねる人が判らない、ということはその謎全てを解いているということにはならない、と考えたわけ。

「最終的に頭…、もう十分使っているけどね」

頭をコンコンと叩く素振りを見せた。

「これって頭脳の頭っていう意味なのかな…」

「どういうこと？」

「うん。例えば頭って先頭って言う意味もあるじゃない、頭上って言う言葉にすれば上の方を意味するし。さっきの謎の内容からしてそのままの意味で決め付けるのは危険じゃないかな」

若菜が腕を組みながら言う。すると、優子が若菜の言葉に反応した。

「頭っていうと先頭よ。うちのママなんて学校でも塾でも頭を取れ、トップを取れってうるさいんだから」

苦虫を噛み潰したような渋い顔で答えるが、話の内容が見当違いの方向へ向かっている。どうやら言葉だけを捉えて反応したようだ。

「じゃあ、言葉の先頭を取ってみようか」

若菜が優子の言を容れるようにメモ帳を捲った。若菜は優しいんだな、どのような状況でも他人を思いやる気持ちを忘れていない。しかしこの場合、優しさの隣りに弱さも同居していることは知っていた。そしてそれが悲しくもある。

「『堅』『雪』『弱』『虎』『占』『交』『里』の先頭の文字は…、

『け』『せ』『じゃ』『こ』『せ』『こ』『り』ね、全部音読みだと。うゝん、全く意味を成さないようだけど。今度は音読み訓読み混ぜてみようか」

ノートを捲り、新しい箇所書き込もうとするが若菜が止めた。

「多分、違ふと思う。直美ちゃんの叔父さんなら、そうしなければいけないヒントを出している気がするし」

確かにそうだ。今までの謎にも、皆が一応納得する理由が存在していた。音読みにする、或いは音読み訓読みごちゃ混ぜにしてさらに並べ替えて意味を成すものなら、そういう言葉が書かれていないといけない。

「となると、どうすればいいのかしら」

「『最終的に』っていうところにヒントがあるんじゃないかしら。さつきは単に頭文字を並べただけだもんね」

「これならどうか。さつき若菜が言った魚偏をくっ付けた上で頭文字を並べる…」

「あ！そうだよ。それなら魚偏を付けた上で『最終的に』上から読んでいくっていう、辻褄も合ってくる。ありがとう、直美ちゃん」

こちらが赤面してしまうくらい、若菜が満面の笑みを湛えて答える。嬉しかった。

「まだ正解かどうか判らないよ。まず、この文字を読めなければ」
全ての文字に魚偏を足した。さつき若菜が言った『かつお鰹』と『いわし鰯』は判るのだが…。

首を傾げる二人をよそに、優子が話し出す。

「あのねえ、習ってないものに対して答えを出そうなんて無理よ。だって頭の中に入っていないんだから。そういうことは判る人に聞くのが一番よ」

と言い出すと、ヒョイ、とメモ帳を掠め取り、水族館の入場口へと歩き出した。どうやら水族館の従業員に聞いているようだ、メモ帳を片手に何やらやり取りしている。しばらくすると、その従業員にペコリと頭を下げ、駆け足で戻ってきた。

「判ったわよ。『鰹』^{かつお}『鱈』^{たら}『鰯』^{いわし}『鯪』^{しやち}『鮎』^{あゆ}『鮫』^{さめ}『鯉』^{こい}だつて」

別に得意げな顔をするわけでもなく、当然といった感じでメモ帳を差し出した。そういえば『知識は（勝手に）増えるものではなく（努力によって）増やすものである』とか何とか言ってた人がいたような…。

「ありがとう、優子ちゃん。じゃあこれを『最終的に』』という言葉葉に当て嵌めてみると、『か』『た』『い』『し』『あ』『さ』『こ』になるね」

「何か人の名前っぽいね、『かたいしあさこ』って」

「水族館の中にいるのかな、そういう人が」

二人が唸っていると、優子が口を挟んだ。

「ああ、もうじれったいわね。わからないことは聞く、っていったでしょ。自分の頭の中にないものを捻り出そうとしても時間の無駄だよ。それで答えが出て来たら勉強なんてしなくて済むんだから私と若菜を手招きして、また水族館へと向かった。私と若菜は目を丸くして後を追いかけた。

「優子、それってお母さんに何百回と聞かされているセリフなんじゃない？」

歩いている優子の後姿に問いかけてみると、クルッと顔を向けて、
「何万回も、ね」

と真顔で答えた。

「あれ、さっきの…。今度はどうしたの？」

優しそうな笑顔で話しかけてくる綺麗な女性。青色に統一された服装は海を連想させているのだろうか。

「あの、この水族館に『かたいしあさこ』さんっていう方いますか？」

「ああそれって私の事ね、『片石亜沙子』。そうか、あなた達がトレジャーハンターってわけね。こんな可愛い女の子達だとは思

わなかった」

少し驚いた様子だったが、納得したのか直ぐに笑顔に戻る。

「トレジャーハンター？」

未だかつて聞いたことの無い言葉だ、日本語なのかな。

「そうトレジャーハンター、宝探しをする人のことよ。あなた達お宝を探しているんでしょ？」

三人とも首を縦に振る。有はどうやってこういう人と話をつけたんだろうか。

「はい、これ。あなた達のお父さんはとても良い人ね。子供のためとはいえ、こんな面白い遊びまで考えてくれるなんて。お父さんが笑っていたのが印象的だったわ。この話をしている時、とても嬉しそうだった。もう日も落ちてきたけど、あなた達も頑張つてね」紙を差し出して三人の頭を撫でると、お客さんのところへ行ってしまった。

又、お父さんに間違えられたな。あんな怠け者と一緒に……。そうか、有は笑っていたのか。嬉しそうに笑っていたのか……。なぜだかわからないが、そのことが泣きそうなくらい嬉しかった。

「どうしたの、具合でも悪いの？」

涙ぐんでいる私を見て、若菜が心配して声を掛けてくれる。私は「うっん、さあ次はどんな謎かしら」と涙を振り払うように声を張り上げて笑った。

□

天地人の理を三本足で統べる者

秘めたる熱き魂は鼓動高鳴る胸の中

漆黒の気高き姿にて太陽に向け飛び立たん

□

「直美の叔父さんは、私達が小学生だってこと知ってるよね？難しい言葉が多すぎるんだけど」

再三再四愚痴をこぼしている優子だが、今回の件は同意見だ。作っている過程で気持ちが高揚したのだろうか、謎を重ねる毎に言葉遣いが難しくなっている気がする。それも作戦のうちなのか…。

三人が佇む地面には、影が随分と長く伸びている。もうすぐ夕方と呼ばれる時間帯にさしかかろうとしていた。

読者に挑戦状

上記の文章は何を表しているか？

出題4（後書き）

ヒント

？示している者とは人ではありません

？三本足が最大のポイント

謎解き4

「若菜、言葉の意味わかる？」

「うん…、大体は」

曖昧な感じで答える。大体判るのなら御の字だ、私は大体のところが判らない。

「今度のも何かしろとかつていう取っ掛かりが無いタイプみたいね。しかも前みたいにシンプルでもなさそうだし」

「そうだね」

若菜も攻めあぐねているようだ。首を左右に捻っている。

「『天地人』『理』『統べる』つていう言葉の意味を教えてください？」

意味が判らなくては解けるものも解けなくなってしまう。全く有の奴、配慮つてのが足りないんだわ。だから未だに独身…、つて危ない危ない、大きく脱線するところだったわ。

「私も詳しくは知らないけど、『天地人』は世界のすべての事象を表しているんだと思う。そして『理』つていうのは『ことわり』つて読んで、法則や自然の摂理なんかのことを言っていて、最後の『統べる』は『すべる』と読んで、統率するとか統治するとかで使われる言葉だね」

毎日欠かさず読書をしている若菜だけあって、言葉に対する知識は相当なものだ、と改めて感心した。見習おう…、とは考えなかったけど。

「ということは簡単に説明すると、全てを支配している人が三本足で熱い魂と黒い姿で太陽に飛び立とうとしているわけね」

別に投げ遣りになったわけではないのだが、そう言つては身も蓋も無い、という様子で二人が苦笑した。

「けど、三本足の人っている？」

優子が疑問を呈する。

「それに、飛ぼうとしてるよね、太陽に向かって」

通常人間ではありえないことばかりだ。ということは…。

「人、ではないのかな」

若菜が呟くように言った。

「ねえ、飛行機ってことは考えられない？空を飛ぶし、形が三本足っぽくない？」

なるほど、両翼と尾翼をそれぞれ足に見立てたらそう見えなくも無い。

「けど、黒くないよね。別に世界を支配しているわけでもなさそうだし」

そう言つと、三人とも押し黙ってしまった。

「そのまま、この言葉のままで解けるんだよね？」

「うん、それは間違いないと思う。指示するような言葉は見当たらないから」

「三行になっているところにも意味があるのかしら？」

「そうかもしれないけど、前の謎とかと違って流れとして意味が通じるものだから、全体の文で何かを意味しているっていう感じのほうが強いのかも…」

受け手に回っている若菜も苦しそうだ、首の傾きが深くなっている。

「飛ぶ、で真つ先に思い付くのは鳥よね」

「でも、三本足の鳥なんて聞いたことないよ」

「そもそも三本足の動物っていたっけ？」

二人はかぶりを振る。私だって聞いたこと無い。とりあえず動物園に…、行っても意味はないだろう。

「ということは、元々二本足の動物に何か一本を見立てて3本にしたのか、四本足の動物のどこか一本削って3本に見立てたっていう可能性があるわね」

「それなら、四歩足の方がいいんじゃない。だってこの動物は天地人を支配しているんでしょ、2本足の補充みたいな3本目の足で支

配なんて出来っこなさそうだもん」

確かに優子のいうことも一理ある。しかし文章を読めば、この動物は空も飛ぶのだ。四本足でさらに空を飛ぶ動物なんて聞いたことがない。そもそも翼自体が前足が進化したものなのだから、さらに四本足ということになると、元々六本足という計算になる。そんな動物は過去にもいないだろう。

「尻尾を足に見立てたてというのはどう？人間も昔は尻尾があったっていうじゃない、それを一本と見たら人間だって三本足になるよ」

それでも人間は空を飛べない。やんわりとした口調でそう言うと、優子も黙ってしまった。

「じゃあ、人とか空を飛ぶ動物を重ね合わせたってというのはどう？人間で二本足でしょ、そして人間が一本足の飛べる動物を背負うの。そうしたら三本足だし、空も飛べるし」

一本足の飛べる動物…、いるというのならそいつは妖怪だ。その妖怪が人間を一本足で掴んで空を飛べる保証はどこにもない。

優子はこの話が好きなのか、突拍子もない話が次から次へと飛び出してきた。宇宙人説に未来人説…、最初に聞いた妖怪が可愛くなっていくほど現実離れした話がまことしやかに語られるこの状況では、もしかしたら三本足の動物っているのかもな、という錯覚さえ起こしてしまいそうだ。

「三本足っていえばスフィックスの話が有名だよな」

しばらく黙っていた若菜が話し出した。ずっとSFじみた話に興じていた我々も耳を傾ける。

「赤ん坊の時が四本足で、大人が二本足、老人になって杖をつき始めたら三本足になるっていう話ね」

うん、と若菜が頷く。しかし、何度も言うが人間は空を飛ぶことが出来ない。ましてや老人になってから天地人を統べるというのは…。それに人間は黒人ばかりではないし、その黒人にしても漆黒というほど黒くない。やはり示しているものは、人間ではないのだ。

若菜もそれ以上口にしないところを見ると、見当違いだったと悟

ったのだろう。再び黙ってしまった。

キーワードを拾い集めてみよう。この文章が示す者は、世界を支配して、三本足、黒い姿で、空を飛ぶ。

「一番近いのは、カラスかな…」

ボソリと呟いてみた。が、三本足のカラスなんていない事は判っている。

「今までで天地人を統べた人なんていたのかな。そもそも統べるってどういう状況なの？」

優子が、訳がわからないという感じでまくし立てる。その気持ちは良くわかる、現実はこの状況に当てはまる動物なんて…。

「これって、想像の動物っていう可能性ないかな。ユニコーンとか龍とか」

そう聞いた優子の表情が明るくなった。

「なるほど、それなら視野が広がるね。フェニックスやワイバーン、グリフォンやキマイラ、ガーゴイルやツチノコなんていうのもいるよ」

最後のツチノコは絶対に無いと断言できるが…。思ったよりいっぱいいるんだ、想像上の動物って。

「その中で三本足の動物っているの？」

途端に優子のトーンが下がる。

「いない…ね」

そんなことだろうと思った。ツチノコに関してはゼロ本足だよ。

「黒い姿で空を飛ぶのは？」

「ほとんど空を飛ぶけど、真っ黒いのは…いないね」

ようするに全滅というわけだ。狙いはいいと思ったんだけどな。

「真っ黒っていうと、あまり良いイメージしないね」

「ピンとくるのは、カラスかな」

若菜が言う。やっぱりカラスだよな、でも三本足っていうのは…、あつ！あつ！

「いた！いたよ、三本足のカラスが！」

いてもたってもいられず走り出す。

「何処行くのよ、動物園？」

優子が慌てて追っかけてくる。若菜もその後に続く。違う、違うんだ、そういうことじゃないんだよ。

目的地に到着して立ち止まる。止まった途端に汗がどつと噴出してきたが、そんなことはどうでもよかった。全力疾走したためか、心臓の鼓動がなかなか収まらない。それとも謎が解けたという高揚感がそうさせるのか。

後を追ってきた二人も私の元に着いた。ひい、ふう、と肩で息をしている。着いた先とは、グッズの販売店だった。

「こんな所に、カラスがいるの？」

まだ息の荒い若菜が、途切れ途切れに話す。

「あ、もしかしてキャラクターのぬいぐるみとか」

こちらも息苦しそうな優子が胸を押さえながら言う。

「まあ、ついてくればわかるよ」

得意げな顔で二人を見ると、売店の中に入っていった。

広い店内を迷わず目的の場所にスイスイと歩いていく。なぜ迷わないって？それは…、昼過ぎにも来たことがあるから。

「ここよ」

「ここって、スポーツグッズのコーナーだね」

優子が周りを見渡していった。

「そう。そのサッカーコーナーに答えがあるんだ」

そう言ってサッカー日本代表のユニフォームを一つ棚から取り出して広げ、胸のエンブレムを指差した。

そこに描かれていたのは『ヤタガラス』。文章どおりの黒い姿に三本足。黄色地に橙の線は太陽の光を表しているのだという。

これも有の作戦だったのだろう。このアミューズメントパークには動物園があるから、動物園に目を向けさせて実は全く関係のない場所を示している、と。

二人も大きく頷き納得したようだ。三本目の足がボールを掴んで

いるのが可愛いね、などと評価し合っている。

「けど、これじゃ次の場所がわからないよ」

若菜が言って初めて気付いた。謎を解いたという衝撃のため、他のことがぶっ飛んでいたのだ。

「今までの流れじゃこの文章に隠されているわけでしょ。『ヤタガラス』で使った言葉以外はどんな文章だっけ？」

「『秘めたる熱き魂は鼓動高鳴る胸の中』だね。この文章はヤタガラスには使われてないよ」

若菜がスラツと答える。若菜も有の出題傾向にだいぶ慣れてきたようだ、押さえるべき箇所を押さえてきている。

「これが何を意味するか、だね」

「『熱き魂』『胸の中』ね…。鼓動が高鳴っているわけだから、場所 は 心臓 を 表 して いる と は 思 っ け ど」

ユニフォームを広げてみる。丁度胸の辺りにヤタガラスのロゴが付いているのは偶然かしら。

「心臓の辺りにヤタガラスがいるっているのは意味があるのかな」

一応若菜に尋ねてみた。しかし、表情は曇っている。このままだと雨が降っちゃうかもしれないくらいどんよりと重い空気。

「意味はあるのかもしれないけど、この量だと、どのヤタガラスが答えなのか判らないね」

若菜が周りを見回して、最後に私の顔を見る。合計何百着あるのだろうか、一つ一つを調べるなんて到底不可能な量。しかも、サンブル以外は袋に入っているため、袋を破って確認するわけにもいかない。とりあえず棚の一番上にあるサンブルをそれぞれ調べてみたが、空振りだった。うーん、ヤタガラスってどこまでは間違っていないと思うんだけど…。

気が付くと、優子は他のコーナーで物色し始めていた。まるでオモチャを与えられた子犬のよう。尻尾をブンブンと振っているのが見えるようだわ、と苦笑した。

一方若菜は一生懸命考えているみたいだ、ユニフォームを広げたま

ま固まっている。

私はというと、少しあちこちを歩き回っている。ヤタガラスまでは合っているはず、あとはどのヤタガラスなのか…。

スポーツコーナーの入り口まで来た。そこには昼にも見た、サッカーだけでなく野球やバスケットボール、ラグビーやバレーボールなどさまざまな種類のユニフォームがマネキンに着せられ飾られている。あ…。

「若菜、ちよつと来て。あれじゃない」

サッカーのユニフォームを着せられたマネキンを指差す。

「あつ、そうかも。胸の中、っていうのはマネキンに着せられているユニフォームの内側ってことか…」

失礼して、マネキンのユニフォームを裏返してみる。すると、マネキンの胸に紙が貼り付けられていた。ふう、と深いため息をつく。安堵と疲労が入り混じったため息、やっと解けた…。

愚図る優子を引つ張って売店を出る。だいぶ店内で時間を潰したようだ、空はすでに朱の色に染まっていた。

ゴール

眩しい日差しが弱まるのとはほぼ同時刻、等間隔に設置されている電灯に灯りが点き始めた。イルミネーションも点滅し、アミューズメントパーク夜の部が始まったようだ。

「じゃあ、紙を開くよ」

より明るい電灯の下に移動し、もう随分と見慣れた4つ折りの白い紙を開けた。

『G A T E』

紙の最下部に小さく書かれていた。

「『がて』って読むのかな」

「直美ちゃん…、たぶん『ゲート』って読むんだよ」

若菜が小さい声で訂正した。そう聞いた瞬間、あつ、と思い赤面した。有の奴…、英語ばかり使って私に恥をかかせるつもりなのね、などと八つ当たりする。

「はは…、そうだよ。でも、どこのゲートのことだろう？どこに行くにもゲートはあるし」

「紙の一番下に書かれてあるのがヒントなんじゃないかな」

おそらく優子の言うとおりだ。不自然な箇所はそこにしかない。

「これが何を表しているか」

「案内板を見ながら考えよう。その方が判り易いよ」

そうだね、と賛意を示し近くの案内板へと移動した。ここも案内板が見やすいように明かりが灯されており、考えるにはもってこいの場所だ。

「ゲートっていつでも色々だよ。色も形も大きさも、それぞれまるで違うよ」

案内板の略図を見て優子が言う。確かに、水族館は青、動物園は緑、遊園地は橙色にペイントされているし、形も園の特徴を活かした造りをしていてバラバラだ。

「けど、この紙に書かれている『GATE』は黒いペンで書かれています、文字の大きさにも形にも特徴はないよ」

若菜が紙を見ながら話す。色や形が関係ないとするならば…。

「書いてある位置かな…」

不自然な点はこの一箇所。通常ならば、一番上かど真ん中に書かれてあるのが一般的だ。

「あつ、きつとそうだよ、直美ちゃん。これって、入場口のことを示しているんじゃないかしら」

紙から目を上げた若菜が、案内板を指でなぞり始めた。

「案内板だと、一番下は入場口になっているでしょ。それに、このパンフレットの地図を見ても一番下は入場口で描かれているよ」

いつの間に手に入れていたのか、若菜が小冊子のようなパンフレットの見開きを見せ指差した。

「なるほど、きつと当たりだよ。とにかく行ってみよう」

考えるのが億劫になったのか、優子が入場口へと歩き出す。私と若菜もそれに続いた。

朝から来て帰る人と、これから夜の部を楽しもうとする人が入り混じり、入場口付近は結構混雑していた。それでも人混みを縫うようにしてゲート付近に辿り着く。

「直美」

遠くの方から私の名前を呼ぶ声がした。当然聞き覚えがある。

「お母さん、何でここにいるの？」

声のするほうへ顔を向けると、遠くの方で母が手を振っていた。

時々人混みで顔が見え隠れするけど間違いないく母だ、今日は仕事じやなかったつけ。とりあえず、傍にいつて話を聞こう。

「どうしたの、何でここにいるの、有は？」

矢継ぎ早に質問するが、母は苦笑した。

「いっぺんに質問されてもわからないわ。とりあえず仕事が終わってからすぐここに来て、あなた達を迎えに来たの。そういう条件で有に言われてたから。有？私が来たことを確認して一言二言会話し

た後どつかへ行つたよ。帰ったんじゃないかしら、駅の方へ歩いていったから。色んな物を押し付けられたけど、何これ？」

母の里美が私たちの目の前に差し出したのは、小さな箱のような入れ物。形状はちょうど宝物の形をしていて、開閉する部分にはこれも小さな南京錠が3つ付けられていて、今すぐに開けるというわけにはいかないようだ。

「ああつ、これって宝物じゃない？」

優子が真つ先に反応する。まあ優子じゃなくてもあの形なら誰でも想像できるけど。しかし、今日一日かけて求めてきた物だけに、三人ともいやが上にも期待が高まる。

「ちよつと、それ貸して」

母から素早く箱を掠め取る。そして錠を確認する。南京錠の中央部にそれぞれ違った文様が描かれてた。その内の一つの模様を見たとき、バチバチと目の前に火花が飛んだような感覚に襲われた。

『この錠は、最後の最後で必要になるとても重要なアイテムなんだ。これを直に渡しておくから大事にしまっておくんだ。二人には絶対に言ってはならない、言ってしまうと宝に辿り着けなくなってしまうからな』

この宝探しを始める前に、このように有から言われて渡された錠…、それはこの南京錠に描かれている模様と瓜二つだ。無意識にポケットの中に手を入れ、錠の有無を確かめていた。

しかし、南京錠は合計3つ。他の南京錠には四葉のクローバーと、これは桜の花かな、が描かれている。どこかで残り2つの錠を手に入れとなくなっちゃいけなかったのかしら、見落とした事は無いよう

に思っただけだな…。

一緒に宝箱を覗き込んでいる二人にも意見を聞こうと顔を向けてみると、二人は先ほど私が見せたような驚きの顔のまま固まっていた。もしかして…。

有は最後の最後まで鍵の存在を二人には内緒にしておかないと、お宝には辿りつけないと言っていた。それはこの場面のことを言っていたんじゃないだろうか。いや、そう信じて行動するしかない。

「実は私、この南京錠を開ける鍵の一つを持ってるよ」

ボソツとそう告げると、一瞬にして固まっていた二人の表情が融解していくように和らいだ。

「そうなの？私もここに来る前、直美の叔父さんに鍵を渡されたんだけど、お宝を見つけるまで他の二人には絶対言っちゃいけないって口止めされてたからどうしようって思ってた…」

そう言っつて優子のポケットから取り出された鍵の模様は、クロ―バーの絵が描かれていた。

「私も叔父さんから…」

どうやら若菜も同じ事情で手渡されたようだ。桜の花の絵が描かれた鍵をそつと掌に乗せた。

最後の最後まで有にしてやられたんだわ。この鍵は一つで意味を成すものではなく、三人揃って初めて完結するもの。それを一人一人に手渡しておいて、お互いの気持ちを牽制させていた。もし、宝探しの途中で誰か一人が鍵の存在を暴露してしまうと、そこでゲームは中途半端な状態で終わっていたのかもしれない。結局、このゲームを面白くするのもつまらなくするのも私達にかかっていた、ということね。

しかし、私達は最後まで鍵の存在を隠し通すことが出来た。どこで様子を見ていたのか知らないが、その時点で有は私達には宝を貰う資格を認め、母にこの箱を託して去っていったのだろう。

「これがお宝…」

このゲームで一番目を輝かせ、奮闘していた若菜は感慨深げに呟

いた。

「でも、ちょっと小さすぎない？この箱」

突拍子もない発想で私達を混乱させたが、それが人知れずヒントになっていたという、結局のところ、このゲームに参加したことが良いのか悪いのか判らなかった優子は箱の小ささに不満を抱いているようだ。

「優子、それは違うよ。『舌切り雀』でも大きなつづらを選んだお婆さんは結局のところお宝にありつけなかったわ。小さい箱の方が返って本物って感じがするわ」

「直美ちゃん、それはおとぎ話だよ……」

得意げに話す私を、心配そうな表情で若菜が見つめていた。

「とにかく、開けてみようよ」

優子の一声が合図となり、三者三様の模様に合致する南京錠に鍵を差し込んだ。

エピソード

始めに私が鍵を開けた、その次が優子、若菜が最後に鍵を外す。心臓の音が外まで聞こえそうなほど大きくなっているのが自分でも良くわかる。

「開けるよ」

優子が箱の上部に手をかけ、蓋を開けた。覗き込むように中を確認してみると、本日再三見てきた4つ折りの白い紙。この期に及んでまた謎を解けていくのかしら。

二人とも拍子抜けのように緩んだ顔になっていたので、私が紙を取り出し読むことにした。

『この手紙を読んでいるということは、三人とも、一人も欠けずにゴールしたということ。素直におめでとうと言いたい。君達はこの中に貴金属、宝石、或いはお金が入っていることを期待したのかもしれないが、そういう類ではないということを断っておくとともに『宝』という言葉は決して物に対してだけ使用される言葉ではない、ということ判って欲しい。』

実をいうと、君達はこの箱を開ける以前に宝を手に入れているんだ。この謎を解いていく過程において、仲違いをしたかもしれない、或いは友人の対応に戸惑ったり困ったり、悩んだりしたかもしれない。それでも、最終的にはゴールまでたどり着くことが出来た。各々がそれぞれの意見を出し合い、受け入れ、主張し、正解を導き出すことが出来た。

今日解いた数々の謎を解く最大の鍵は信じること、正確に言えば、お互いを信じ合うこと。だからこそ、友人の意見を素直に受け入れ

ることができ、又、自身の主張を述べることが出来たのだと思う。

そしてこの企画最大の狙いは『絆を深める』こと。君達はこのゲームを通して、友人の違う一面を垣間見ることが出来たのではないだろうか。それは決して良い部分だけではない、時には学校では見せない、戸惑ってしまうような部分も見えてしまったのかもしれない。しかし、それこそがその人の個性なのだ。受け入れられるかどうかは自分自身の判断に任せられる。『絆を深める』とは単に人の上っ面を舐めあうだけの関係ではない。その人の良い部分も悪い部分も見たとで、切磋琢磨できる関係になり得るかどうか、ということが重要なのだ。そうしてこそ結び付きが強まり、信頼は深まるのである。君達はこのゲームの勝者だ、お互いの『絆』が深まったであろつと確信している。

今は、私が言っていることが理解できないかもしれない。しかしそれは何年か先、きつと心の奥で光を帯びてくるものだと信じている。そしてそれは何年、何十年と輝きを増していくものであることも。

これが今回用意した宝。活かすも殺すも君達次第だ。

しかし私は信じている。君達がこの先苦難の道にさしかかろうと、家族、友人、恋人の助けを借り一緒に乗り越えて、その先にある光を手にすることが出来るということを。

そして私は願っている。君達がより多くの幸福を感じ、人を思いやり、素晴らしい人間になっていくことを。

本当に輝く宝物とは、いつも君達の心の中に。

芝井 有也

読み終えた後も釈然としない気持ちが漂う。母を見てみると、意味ありげに微笑んでいた。有が書いた手紙の意を悟ったのだらう。

「これが宝物なの、言っていることは判るけど…」

優子は若干不満のようだ。その気持ちは理解できる。一日歩き回ったの結果がこれじゃ…。しかし、有の手紙にもあるように、これが宝に思えるかどうかは自分次第なのだ。

「直美ちゃんの叔父さんは凄いな…。ほんとに…。凄いわ」

若菜は…、泣いていた。この手紙の真意を理解し、ストレートに心の奥に届いたようだ。有にしてみたら、してやつたり、ということかしら。若菜には、この手紙の内容は一生心に残ることだろう。有の言った『呆れるほど素晴らしいお宝』を若菜は手に入れたようだ。

私はというと…、半々かな。有の言っていることは判るけど、日頃の有を知っているだけに、やられっぱなしっていうのが腹立たしくもある。

けど、二人は楽しんでくれたようだ。様々な思いはあれど、今日は楽しい一日だった。それで良しとしよう。

「あつ、そうそう。有にお金もらってるんだ、夕飯をご馳走してやってくれたって」

母が一万円札を一枚ヒラヒラさせて言った。途端に優子の顔が明るくなる。

「おばさん、お寿司食べに行こう！さっき直美と若菜と食べたいって話をしてたところだったんだよ」

グイグイと母の手を引いて入場口へと向かった。母も若菜も笑っているが、優子が行きそうなお店は一万円で足りるのかしら、と私だけが引きつったような笑顔で、三人の後を追った。

宝探しの終焉を告げるように、空のかなたに見え隠れしていた太陽が、ついに見えなくなってしまった。

<
了
>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4889s/>

アミューズメントパークでの宝探し

2011年4月26日12時08分発行